

第二期 第五十四号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2021. 01. 20 定有堂書店 発行

本屋トーク (document抄)

奈良 敏行

(定有堂 店主)

本屋トーク (document抄)

奈良 敏行

いちばん嫌いでいちばん好き

三浦 永理

失われた本をもとめて『さよならまでの読書会』

三紗 慶明

二〇二〇年の振り返り

丸 祐一

「深い学び」をめぐる III

松田 裕史

ヤポネシア⑨〜アダンの木の下で

芝野 浩貴

空想の郷土美術館

萩原 俊郎

なんでも売らなあかん日記

鳥居 貴彦

八代日記 (十)

齊藤 仁昭

ユメユメワスルルナカレ

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その五十三

内田 克彦

戦禍の楽人 II 修士Hの場合 下

秦阜 梅林

年賀状

あきの素生

あいさつ

ドラマリア

…… 編集後記



出会った人に興味を持ちその人の人生に関心を示す。

その人に投げかける質問はなんだろう。わたしは本屋だからどんな本を読んできましたかと聞く。本を選ぶのはアイデアつまり自分のしたいことを探すこと。本を読むのでしたいことに出合うのだろうか。したいことがあるから本に出合うのだろうか。 (2020-54-01)

読書にはじつは結論はいらぬ。読んでいる間の、時の流れ自体がここちよい。人と人とのふれあいで、会話それ自体がたのしいことがある。それを交話機能というらしい。内容よりも出合っていること自体の喜びだ。そんな本とのコンタクトを縮めていけば活字好きという。交話読書というのだろうか (2020-54-02)

このところ耽読について考えてきた。本好き本屋好きという周辺の日常を見ていると、耽読という言葉が立ち現れると、すべてが思考停止となることに気がついた。本に耽溺する。アディクションと読み替えるとすでに依存症。読書はそれ自身で文脈を形成する。要するに真っ直ぐ歩かないことが大切。

(2020-54-03)

ある日初老の男性が訪れ、紀行本のコーナーを尋ねる。本屋に根を下ろし半径一キロの日常なので、ガイド本の旅しかイメージしていなかった。その人は探検部の後輩の本を見つけて購入した。そして中東で過ごした人生を聞いた。名刺には探検家とあった。数日後、紀行本の棚を作ろうと思った。

(2020-54-04)

本に暮らしのスタイルを求める。大事なものは日常の暮らししかないと感じる。本屋に並ぶ本の群れは人の日常を入り口とする。しかし行く果てはとてつもない広がり。ライフスタイルとは日常のもう一つの日常と知る。本ではじまる日常がこの世の枠に収まるはずはない。

(2020-54-05)

耽読にはバイアスがある。読書体験に一つの衝撃があった場合その一つを繰り返して探し求める。同義反復の読書が熱を帯びると、なにかしら確かな世界が成立する。しかしふと気づくと知り得た以上に話してしまっている自分がそこにいる。こんな自分の耽読下の読書を、確認バイアス読書と顧みた。

(2020-54-06)

旅をすると、いままで出会わなかった種類の人と巡り会い対話を交わす。自分という物語に新しい気づきがあり物語が補完されていく。自分が出かけないが、本屋には種々雑多な人たちが訪れる。会話が弾めばやはり自分の物語が更新され、棚の本も磨き上げられる。ふと地動説と天動説を連想した。

(2020-54-07)

本屋的人間。言葉が世界をつくっていると信じている人。世界を体験することと、本棚の迷宮に棲みつづけることを等価と感ずる。一冊の本の中で出会う視点や考え方が、現実の見方を変える。そして、それを本当だと思ってしまう。それでも本屋の扉を開ければ、幸いそこには確かな外部が待っている。

(2020-54-08)

未来が現在に構造を与える。そんな希望のもとに本を読む。指針を求めて本を読むという立場をいつているのかもしれない。未来を知るとセルフイメージが変わる。ここで示される未来とは集合的な夢の方向性かもしれない。本をきっかけに生活のリスタートをくり返す。そして明るい方へと歩んでゆく。

(2020-54-09)

2020.12.26

『たまゆら』

第4号

たまゆらの会 2020.12

高多彬臣先生たちの同人誌。九人ほどの方々が寄稿。

「ご寄贈いただいた高多先生は、寸劇で『臨時職員会議』という戯曲をお書きになっている。政府に拒否されている講師を招くことで、紛糾する職員会議のドタバタが、喜劇風味で書かれている。趣旨を手紙に次のように記されている。

「わたしも周辺を見まわして、政治、社会問題と正面から向き合わず、これを忌避し、仕方がないとあきらめている風潮がますます強くなっているのを感じます。こうした全体主義体制で国民が囲い込まれたらどのようなことになるか。その一端を少年時代に体験している私にとって、これは見過ごせない問題であり、学術会議会員拒否問題は、単に大学、研究者の問題に止まらず、地方の中学、高校の教育現場にまでも萎縮をもたらすのではないかと危惧します。」

高多彬臣先生は、高等学校長、鳥取県立図書館長、鳥取短期大学教員を経て、鳥取県図書館協会会長、鳥取県日仏友好協会会長。著書に『エマニユエル・ムーニエ、生涯と思想』人格主義的・共同体的社会に向かって』青弓社などがある。

定有堂教室「読む会」

(岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

いちばん嫌い、いちばん好き

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

は私にとって初めてだった。電車移動を毎日していた私にとって移動時間は、読書の時間だった。かつては三十分以上かかるその時間に、受験勉強もしたし、本も読んだ。それが失われた今、本を読む覚悟がより必要になった。

どこに住むにしても、本さえ読めればいいと思っていた。本を探せる本屋がある場所なら、どこでも暮らせる。

鳥取の街に就活でやってきた時、私がしたことは知的好奇心を刺激されるような本屋探しだった。本当なら、東京でしているように大型書店でいろいろな類の本を雑食したいが、鳥取では難しいことまでは知っていた。

そこで見つけたのが、定有堂書店だった。「私、ここに住めるかもしれない。」と確信したのは、たった一か所の信頼のできる本屋のおかげであった。

鳥取に雪が降った。十二月にこれだけ積もるのは最近では珍しいらしい。夜から雪が降り続けて、朝窓の外は、雪化粧の新鮮な銀世界だった。静かに感動した。かわり映えない風景が、一夜にして変わったのだから。紅葉の上に積もる白い雪。山々も粉をまぶしたような白さ。道は真っ白になって消えてしまった。その数秒後に、私は自分に語りかけてしまう。「これは何も特別なことじゃないよ。これが私の日常になるのに。」

この一年、私の「新しい日常」になったのは、これまでの人生になかった風景だった。川の上を飛ぶトンビ、家の近くに広がる田んぼ、晴れた日の夜に広がる星空、家の前に積もる雪の塊。スパーはいつしか車で行く場所になって、十分・十五分歩くのも珍しくなってきた。

ふと思えば、職場も買物も、これだけ近場で済むの

引越しの時、先に荷物を送ってしまった後、実家の部屋からはありとあらゆる本が消えた。すると、急に私の部屋は他人のもののような気がして、早く「自分の部屋」に行きたいと思った。そうして、私の本が手元にある場所こそが、私の「居場所」だったと知った。

四月、この街にたどり着いて、馴染んでいくうちに、

今度こそ、ここに住み続けるのではないかと思つた。たつた四半世紀の人生で、実家は四回場所が変わつたせいで、東京を故郷と言うにはいつも違和感がある。そんな私が、こんな穏やかな場所が自分の「居場所」になったらと微かな期待を抱き始めた。

本を読めれば、どこでも満足に生きられるはずだつた。それでも今までの生活と全く違う生き方が求められていくのだから、自然と不満が出てくる。新しい仕事に、慣れない家事。人と知り合おうにもなかなか機会がなく、スポーツを始めたりした。かつてのように旅行したい。美術館に行きたい。舞台や映画を観たい。自分の中で文化的活動がひしひしと縮小していくのを感じた。何より私は自分が思つていたより寂しがり屋だつた。

私、鳥取のことそんなに好きじゃないんだろうか？

二〇二〇年。思つたような一年にならなかつた。

今思えば、思つたようになつた一年など一度もないのに、いつか振り返る時、今年ほどどうしようもなかつた一年はないと錯覚してしまうだろう。「新しい日常」が誰のもとにも平等に降つてきたのだから。

二一、三年で帰つてくるんでしょう？ 今は修行みたいなものよ。」と母親に言われた時、そんなつもりだつた自分もいたなと思つう。

ただ仕事を始めた今、二一、三年などという短い時間で、本当に得たいものが得られる確信はない。ひとつずつ石を積むこと。根を下ろすように生きていくこと。私が「新しい日常」に求めていることは、そういう確実な一歩だ。この一年で変わったことがもうひとつある。それはいろいろの人から本を薦められるようになったことだ。今までは、年に数度そんな機会があつても、それは私の「日常」にはなかつた。それが今や、職場の同僚、定有堂書店の読む会の参加者、そして店主の奈良さんと、ふとしたことから本を薦められることがある。それは、大型書店で雑食するように本を見ていたかつての自分とは違う「新しい日常」であつた。新刊ばかりに囚われず、筆者の考えを鵜呑みにせず、腰を据えて読んでいくことは、着実に積み上げていく読書体験の始まりでもあつた。

変化ばかりのこの鳥取一年目の「新しい日常」を、私はいつかこう振り返るだろう。

あれがひとつめの石を積む瞬間だつたと。いちばん嫌いであらばん好きだつたと。

失われた本をもとめて

『さよならまでの読書会』

三砂 慶明

(読書の学校)

定有堂書店の奈良さんと出会ってから、考えるところがあつて、読書会の本ばかりを読んでいます。自分でも何年間か読書会をやつてきたので、今更かという思いがないでもありませんが、読んでよかつたと、今は静かな感動に包まれています。

『ブリズン・ブック・クラブ』『デヘランでロリータを読む』『パトリックと本を読む』『ガンジー島で読書会』『ジェイン・オースティンの読書会』。なぜ、今まで読まずに積んでいたのか。

読書会の本を読んでみてわかつたのは、読書会には大きくわけて二つあり、ビブリオバトルに代表される紹介型と、課題図書を参加者全員で読んで話し合う会読型です。私の勤め先の同僚たちは会読型が多かつたのですが、私は紹介型を選択して、今にいたるまでまっしぐらに突

き進んできました。紹介型は、毎回、参加してくださいるお客様との真剣勝負で、その勝負は会が終わるとわかりやすい結果で現れます。すなわち、買っていただけるか否かです。私たち書店員は、本を売るのが仕事なので、当たり前ですが毎回真剣勝負です。テーマをつくったり、同僚と対決したり、編集者と対決したり、他店の書店の方とおすすめしあつたりと、興味が赴くままに続けてきました。本を買ってもらえると続けるためのエンジンになりますし、何より自分が読んだことのない領域を開拓して紹介するモチベーションになります。

ですが、本当に自分がやりたかつたのは、紹介型ではなかつたのかもしれないと、読書会の本を読んで気づかされました。一冊の本を、みんなで読むことを通じて、それぞれの読みや解釈、人生が重なり、本の厚みが増していく。本の広がり、人生の深みが交差して、人と本がつながっていく。言葉が、思いがとまらない。私がつりたかつたのはこれだ、と直覚しました。

『さよならまでの読書会』は、末期癌に侵された母親と、編集者から新規事業に乗り出した息子がはじめた、たつた二人の読書会の記録です。気が重くなる化学療法 of 長い待ち時間に、母から、「いまは何を読んでいるの？」と声をかけられてから、毎月、母と病院で待ち合わせる。ときまでに同じ本を読み、一冊の本について語り合いま

す。未読の山をかきわけて、数ヶ月後に確実にやつてくる死の前に、母と何を読むのか。時間は限られており、正解はありません。選書に失敗したり、何をすすめるべきかで逡巡しながら、しかし、その思いをことごとく汲み尽くして読みを深めていく母に、あるとき、息子が自分の発見を伝えます。

「ねえ、ぼくたちのブッククラブっていうのは実質、一生涯はいつていられるんだね」

母は同意を示したが、ほかの人と同じことをしている――本の話は妹や兄、友人ともしているとも述べた。「全員がブッククラブのメンバーなのよ」母は言った。わたしはその言葉の別の意味を思い、自然と頬をゆるめた。各自が認識していようといまいと、わたしたち全員がへさよならまでの読書会にいます。何かを読めば、それが最後の本になるかもしれない。話をすれば、それが最後の語りあいになるかもしれない。」

私たちは皆、一人で本を読みますが、読むことを通して確実に必ず、どこかで誰かとつながっている。一冊の本が、次の本へと導くように、愛読書が最後のページをたぐってから、どれほどの年月が流れようとも心に残り続けているように、自分が好きな本を好きだという人

と話して、心を通わせられないことはないのだとこの本は教えてくれました。読みながらあふれだしてくる共感に震えながら、しかし、この本が絶版品切れになる理由はなんだろうと思わずにはいられません。この本を自分だったら、どう紹介して売るだろうか、考えずにはいられません。この本が持っている熱を、どうやったら伝えられるのだろう。年の暮れに、そんなことを考えていました。

二〇二〇年の振り返り

丸 祐一

(法哲学者)

十二月の「読む会」の最後に、参加者にとつての「今年の一冊」を順番に紹介する場面があった。私は何も思い浮かばなかった。何を讀んだのか覚えていなかったのである。手元にある記録(2/27 現在)を見てみると、途中で読むのを止めてしまっている本を除き、どうやら90冊くらい読んだらしい。多くは新書／小説／戯曲なので、法哲学の研究者としてはどうかと思う。買った本の1／5も読めていないと思うので、どれだけ積んでいるのだ。本以外では、映画を100ちよつと見て、展覧会は40ほど行っている。映画はオンデマンドがほとんどであり、これまで繰り返し見ているものを含む。展覧会については、新型コロナウイルスで今年の前半はほとんどの美術館が閉まっていたことを思うと、こんなに行ったかしら? という感じである。演劇も鳥の劇場を中心にいくつか見ることができた。残念ながら豊岡演劇祭はチケットがとれなくて行けなかった。

なんとか思い出して、今年讀んだ本で私にとってインパクトのあった本をいくつか挙げてみたい。國分功一郎『中動態の世界』(2017)は、中動態が失われたあとに責任という概念が生まれてきたということを論じていた。仮に、法学が誰に責任があるのかを問う学問であるとするれば、中動態の消失と法の生成の関係はどうなっているのだろう。國分と同じくギリシア悲劇などを扱いながら法／政治の生成について論じる木庭顕『誰のために法は生まれた』(2018)は、なぜギリシヤ・ローマで意思—責任の世界(法的世界)が生まれたのか、という上記の問題に答えてくれそうな本であった。しかし、本書は「法は何のためにあるのか」を答えてはくれるが、なぜいつ法は生まれたのか、ということには答えてくれない。例えば、自分は雑誌『談』(2018, No. 11)で、人間はどうしても「なぜか」を知りたくなるが、*why*という問いには、「…なのは…だからだ」とひと言で言えるような事実」があるという暗黙の前提があり、「歴史に関して *why* を説明しようとする、どこかうそになる」と言っている。木庭もあえて *How* を論じて *Why* は論じなかったのかもしれない。既存のイメージを破壊してくれたのが今野元『マックス・ヴェーバー…主体的人間の悲喜劇』(2020)である。ドイツナシヨナリストとしてのヴェーバーという、これまで思いもなかったヴェーバーの生き様を描き出して

いる。詫摩佳代『人類と病』(2020)は、国際的に連携しなければ感染症に対抗できないなかで、対立する諸大国が外交を通してどうやって感染症に対応してきたかを描くありそうでなかった研究。健康格差とグローバルジャスティスというどちらも最近の法哲学のテーマにつながっており勉強になった。ちよつと古いけれども審良静男、黒崎知博『新しい免疫入門』(2018)は、ワクチン開発との関係で勉強になる。漫画版は読んでいないが、清水茜原作のアニメ『はたらく細胞』と合わせて見るとヒトの免疫システムがとてもよくイメージできる。ある事情があつて目下の私の関心は腸管免疫にあるのだが、六年も前に出版されたこの本では残念ながらまだ十分に触れられていない。

映画は新作を見るというよりずっと見たかつた作品をやつと見られたという感じ。投資できる時間には制限があるので、どうしても一定の評価を得た作品を見ることになる。『未来世紀ブラジル』(1985)や『ラ・ジュテ』(1962)はSFの古典として。今なら厄介な「適応的選考形成」の問題として見ることもできる『砂の女』(1964)は眞博で見る機会があつた。

展覧会としては、『オラファア・エリアソン ときに川は橋となる』(東京都現代美術館)は、自然を切り取つて作品にする巧みさが印象に残っている。『Cosmo-Eggs

一宇宙の卵』展(アーティゾン美術館)は、キュレーターの服部浩之を中心に美術家・作曲家・人類学者・建築家が津波石にまつわる架空の物語をもとに作品を作るというヴェネチア・ビエンナーレのためのプロジェクト。バルーンに座ることで観客が作品に関与できる面白い作品だった。『ゾンビ音楽』素敵。日本で改めて展示してくれてありがたい。単独の作品としては、三井記念美術館で見た円山応挙の「雪松図屏風」の雪の表現はさすが国宝。同じ国宝でも期待が大きすぎて、実際に見たら少し拍子抜けだったのが『琳派と印象派』展(アーティゾン美術館)で見た俵屋宗達の「風神雷神図屏風」。春に『日本美術の巨匠たち』展(島根県立美術館)で鈴木其一の「風神雷神図襖」を見ていたので、琳派の祖ならどれだけすごいのだろう、と期待を膨らませすぎた私が悪い。それから福岡県立美術館で見た高島野十郎の「蠟燭」と「絡子をかきたる自画像」はそのあまりの迫力に心を奪われた。同じく、『奈良原一高「王国」とVIVOの時代』展(島根県立美術館)で見た奈良原によるトラピスト修道会と和歌山の女子刑務所の写真は、一方は自らの意思で、一方は強制的に、社会から隔絶された世界を映し出して人の業を突きつける。他にも印象深い展示や作品は沢山あつたが残念ながら紙幅が尽きた。来年もこれくらいは動けるとありがたいのだが。

「深い学び」をめぐる III

松田 裕史

(高校教員)

現在使用している英語の教科書では、生徒の知的好奇心を刺激するために社会的に多様なテーマが多く扱われている。しかし、物足りない点が二つある。一つは、文学作品が扱われていないことである。この点は、現代文の教科書とも問題を共有している。もう一つの点として、

レッスンのテーマが努力論に傾きがちなことである。明確なメッセージを提示したい気持ちはわかるが、「努力すれば夢が叶う」といった結論を連発されると読む方も辟易する。これでは、読みの多様性も生まれない。これら二つの点は根っこではつながっている。

ところが、昨年度使用した教科書のなかで、わかりやすいメッセージが見当たらないレッスンが一つだけあった。そこでは劇作家の平田オリザさんが高校時代に敢行した自転車による世界旅行がテーマとなっていた。

平田さんは高校時代、バイトで旅行資金をため、二年間の休学を取り自転車世界旅行をされている。出発は一

九七九年五月五日。二日後にロスの空港に降り立ったところから旅ははじまる。二六か国、二万キロを走破したのち、一九八〇年九月一七日、旅は終わる。

旅の目的や意義を多くの人に尋ねられるが、平田さんは答えに詰まる。人は物事を一般化しがちだが、平田さんはそれを避ける。「All I can say now is that the boy who returned home was a different boy from the one who left Japan 16 months earlier.」という英文が最後の一文だったが、明確なメッセージではないところがかえってなんともいい。

平田さんにもよく分からないということは、読者に新たな解釈の余地が生まれうると私は判断し、旅の価値について生徒に英語で議論させた。と言ってもそれほど高尚なものではなく、論題は「あなたの友達に世界旅行を勧めるかどうか」。議論は白熱し、ディスカッション後のライティングでも質の高い英文が生まれてきたので、この授業実践も読売教育賞の論文に入れることにした。

また、論文の結論部分では奇しくも平田オリザさんの言葉を引用することになった。以下はその一部である。

* * *

「外国語やその背景にある文化」を扱った実践を紹介することはできなかった。しかし、教室にいる生徒達はそれぞれ唯一無二の個性や価値観を持つ存在であり、そ

の点で言えば日本人同士であれ他者と関わることは「異文化」と関わることとほとんど同義である。授業において異質な他者とふれあい、協同的に何か新しいものを創り上げる経験は、将来、実際に外国の文化や人と関わる際の礎となるのではないだろうか。

コミュニケーション能力を向上させることは英語教育における重要な命題であるが、一方で平田オリザは日本の子供たちのコミュニケーションに対する意欲の低下を指摘している。能力の低下ではない。平田によれば、スピーチやディベートなどの「『伝える技術』をどれだけ教え込もうとしたところで、『伝えたい』という気持ちがか子どもの側にならないのなら、その技術は定着していかない」（平田・2012、pp. 25）。これは英語における言語活動にも言えることで、伝えるための必然性や動機がないのであれば言語活動がどんなに精緻に計画されていても内容は浅薄なものにならざるを得ない。私は、その点を克服するためのよすがをディープアクティブラーニングに求め、様々な言語活動を構想し、実践してきた。生徒のパフォーマンスをさらに高め、英語力ばかりでなく価値観や世界観の変容を促すような授業を今後も目指していきたい。

また、「コミュニケーションとは、わかりあうためのものではなく、わかりあえなさを互いに受け止め、それ

でもなお共に在ることを受け容れるための技法である」（ドミニク・2020、p. 197）とは、情報学研究者のドミニク・チェンによる言葉である。早急にわかりあうことを求めるのではなく、わかりあえなさも包摂する言語活動をさらに具現化していきたい。

（参考文献）

ドミニク・チェン（2020）．『未来をつくる言葉』
わかりあえなさをつなぐために』新潮社

平田オリザ（2012）．『わかりえあえないことから——コミュニケーション能力とは何か』講談社

* * *

都甲幸治は『世界文学の21世紀』において、寺尾紗穂との対談で次のように言う。「読者が一緒に旅していく中で、読む前と読んだ後で自分も変わっていくみたいなき感じがします、どの作品も。じゃあ何が変わったんですかと言われるとわからないんですけどね。」（P.135）わからない場所からはじめる授業も、時にはいいかもしれない。

ヤポネシア ⑨

「アダンの木の下で」

芝野 浩貴

(地球探家)

「遠い昔のあの日からこの島に人はいない。みんなみんなアダンの木になった。誰も知らない木の根の下には何があるのか？ 波のかなたから流れてくるのは私の知らない貝殻ばかり」(中島みゆき)は、どの島のことかは、聴き手に任せる。

沖繩本島では魔除けとして、石敢當という石があるが、宮古島ではスイジガイが魔除けとなる。貝の形が水という文字に似ているからの命名だそう。宮古島を上から眺めると池間島までの橋、伊良部島までの橋、来間島までの橋を結び、トゲトゲに描くと魔除けにも見える。「山の形は雨風まかせ、島の行方は波風まかせ」と唄われると、琉球石灰岩でできている宮古島全体が珊瑚として削られてきた様子も想像できる。沖繩本島では北部からのダムで南部の水が潤うが、宮古島には山はない。山川から流れ出る砂がなく、海岸線は珊瑚の小さな砂が反射し

て、人の目にはどの海岸に行っても、各種ブルーのグラデーションが見られ、青空やサンセットの光とのコンビネーションでさまざまな顔を見せる。慶良間ブルーに対する宮古ブルーという色もあるそうだ。

そんな世界有数のリゾート地に成りつつあるのは、下地島空港が国際線の経由地(元パイロット航空訓練地である。空港そのものも若者の観光地となっている)となり、地価が上がったり、ホテルが増設していることからわかる。2025年には宇宙旅行が計画されているという。上記3つの橋も渡ってみた。池間島に行くまでに、サラサラの白砂、吹き抜けの洞窟のある砂山に寄る。風も強く波も荒いところなのかそこより北の西平安名崎には風車が並び、風力発電が設置されている。雪塩の製塩所もある。宮古の塩は地下深層水から取り出した海水を高温で2秒で結晶化してできるので、ビタミンやミネラルを流すことがなく栄養価は高い。

狩侯中を表敬訪問した。突然だったので今回は講義はしていないが、エネルギー・水・少子化など身近に考えなければいけない問題と直面して活きた教材の宝庫でもある。パプアニューギニアにはマッドマンという山岳の民がいて、白い泥で塗り、巨大な仮面を被る。狩侯に近い島尻はマングローブがあり、泥もあることから島独特のクバを纏い厄除けとして泥を塗り付けるパーントゥ

がある。(2018年世界遺産認定)伊良部大橋は、全長3540mでコバルトブルーとエメラルドグリーンの海の上を竜のようなカーブで覆う。

誰しも見た映像ではあるが、橋ができて宮古島に移動しやすくなったので人口は減り、伊良部高校は廃校となった。40便あった連絡船は廃業。隣の島の下地島とも連結しており、そこには外海と繋がる2つの池があり、潮の満ち引きで色が変わる。(摩周湖の深遠なるブルーの時もある)サーモクラインによって色が変わる。冒頭のアダムが群生している。伊良部島と下地島の境界の南にある渡口の浜(ハワイのビーチのように)と北にある佐和田の浜(浅瀬に津波石が点在)は近くても別の景色である。牧山展望台は、サシバをモチーフとしており、宮古島や来間島を一望できる。来間島の展望台は竜宮城の形をしており、そこからは逆に伊良部大橋や東洋一の与那覇前浜を見ることができる。

宮古島出身の先生に島一周案内していただいたが、与那覇前浜が台風や橋の工事により潮の流れが変わったことにより、どんどん砂浜がなくなりつつあることを嘆いておられた。那覇の南西300キロ、石垣島の東北東130キロに位置する宮古島は、沖縄本島や八重山列島と異なる文化伝統を持ち、かつては流刑の島であった。珊瑚島なのでハブはいない。南部のシギリビーチ、イムギヤー

マリンガーデンや東部の新城海岸、吉野海岸には、珊瑚礁が多く、カラフルな熱帯魚を見ることができた。島内では、交通安全のシンボルである「まもる君」随所に顔を出す。地学的には断層を直接見ることができ、東側の2キロの細長い岬である東平安名崎の灯台からは、東シナ海とフィリピン海の分岐点、黒潮の流れや珊瑚礁、断崖と植物群、イノーに波打つ白波など同時に一望でき、自然を総括できた。

土がなく、粘土層の上に溜まる珊瑚岩を通した地下ダムを作った宮古は△風土▽というより△風水▽として未来を考えればいいだろう。

以上、9月の那覇でのプロボノから2ヶ月後、宮古高校と宮古総合実業高校で講義した後で、島を一周した見聞録である。宿は平良港の近くであった。船しかない時代は平良港が宮古島の玄関口であった。そこには人頭税石がある。男は粟を、女は布を厳しく納めるべく追い立てられた。宮古に生きる子供たちが島の命を繋ぐようアダムを見るたびに想い出すこととなった。

空想の郷土美術館

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

年末いっぱい、ほぼ40年勤めた新聞社を辞めることにした、

これまで自分が書いてきた記事や論説、取り組んできた展覧会やイベントについて、幸いなことにほとんど悔いや心残りはない。ただ、奥歯に引っかかったような、いまだに気がかりなことが一つだけある。

◇ ◇ ◇

県立美術館については、ずいぶん昔から書いてきた。1999年11月19日付『空想の郷土美術館』。

倉吉に着任して、昭和初期に日本洋画壇に新風を巻き起こした前田寛治が34歳で天逝した際、当時の倉吉、東伯の町民らが彼の死を悼んで個人美術館を建設しようとして運動を起こした過去を知った。

だが、「当時、美術館は大原孫三郎のような個人の富に支えられた時代であり、浄財を得て組織される民間の

財団法人では、そもそも無理な時代であった」。倉吉市史は無念の結末を書いている。が、戦前に絶たれた「前田美術館の夢」は戦後、文化運動につながり、やがて建設予定地だった打吹公園に倉吉博物館となって結実した。表題の『空想の郷土美術館』は先般、県文化功労賞を受賞した大先輩の角秋勝治元学芸部デスクが、A・マルロー(仏文化相、作家)の評論『空想の美術館』をもじって書いた昔の記事から拝借した。1970年代当時から角秋氏は「文化行政の貧困を表すものとして、施設がない―施設があっても中身がない―両方できて人も人(学芸員)がいない―という図式がままある」と痛烈に批判している。

はたして「美術館が欲しい」と叫ぶわれわれ鳥取県民は、郷土の先人の芸術作品をどれだけ大切にし、ふだんから自分の子供たちに本物(の芸術作品)に触れさせる努力をしてきたか。また作品を価値判断できる専門スタッフをきちんと育ててきたのか。

◇ ◇ ◇

当時の私の論説は、「優れた郷土美術館をつくるには、広範な県民が専門家スタッフと交流・対話の場(ワークショップ)を持ちながら、そこに『地方の主張』を盛り込み、『生活に根付いた美術』を少しずつ確立していくこと。それは(戦前戦後の倉吉のような)文化運動に他

ならない」と結論付けたが、今もその気持ちに変わりはない。

ところが現実には観光目的の砂丘、カニ、梨博物館と並んで県立美術館が組み込まれ、お決まりの誘致合戦の末、鳥取市桂見に建設が決まった。この「狂騒曲」に片山前知事が「財政圧迫」を理由に強引にストップをかけた時は、正直言ってほっとした。

◇ ◇ ◇

話はまだ終わらない。その後、倉吉博物館での新聞社の展覧会に、鳥取市の竹内前市長が朝早く独りでひよっこり訪ねて来たことがあった。「展覧会ができる施設があるのはいいですね」。米子市民には市美術館がある。島根県美や足立美術館も近い。倉吉市民にはトリエンナーレ美術展を開く倉吉博物館。それに比べ鳥取市民はどうか。

同市は大合併後、美術団体が連携してマンネリ化した市展を大改革し、入場者を倍増させたものの、会場は県立博物館の「間借り」で開催時期さえまならない。だが、当時の竹内市長は市庁舎移転問題が大もめにもめ、入場客減の鳥取歴史博物館（やまびこ館）も抱えていた。そんな折、県立博物館長だったY先生から「このままでは収蔵品で館がパンクする」という悲痛なSOSを聞き、2013年11月3日（文化の日）、『それでも美

術館の夢―（片山前知事の）「凍結」解除に動きだせ』という社説を書いた。新聞社では当時、中部の責任者だったが、「県・（鳥取）市連携の道を」と、はじめから東部建設を念頭に書いた。

幸い県議会でも取り上げられ、県教育長は前向きに答弁。県立美術館建設は凍結が解け、文字通り動きだした。

◇ ◇ ◇

ところが、である。またぞろ「どこに建てるか」で東西が激論の末、真ん中（倉吉市）にポトリと落ちてきた（誘致を熱望していた前田寛治の出身地・北栄町でもなく）。次は「どんな建物か」。設計者に決まったのは美術に造詣が深く、倉吉の古い町並みに馴染む木造建築を提案した隈研吾ではなく、楨文彦：不思議なことに前回桂見の設計者が再び選ばれたのだ。今や92歳の大家。どれだけ新しい時代に即した建物が描けるのだろうか。

建設地が決まって以来、中部以外から美術館に期待する声はあまり聞こえて来ない。平井知事も多くは語らない。

ペンを握ってきた人間として責任も痛感するが、こうなった以上、前田寛治ら「砂丘社」の芸術家を育んだ中部のポテンシャルを信じ、やれることをやるしかない――と半ば悲壮感漂う決意を固めている。

なんでも売らなあかん日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

半年に一回くらい、決して名乗らないおじさんがやってくる。誰なんですか、と聞いても絶対に答えない。なんとなく本屋っぽい風貌をしている。どっかの本屋さん？と聞くと「いやまあ」と曖昧なことをいう。夏にやってきた時は変な麻袋を持ってきた。文庫本が一冊ギリギリ入るくらいのやつ。「これ売れへんかな」という。どうですかねえと眺めていると「あと十枚くらいあんねん」と言いつて帰って行った。その三日後、十枚の麻袋がうちの店先に吊るされることになった。値段はつけない。どうしたらいいかわからないから。「これなんですか」と聞く人にはあげることにした。

冬になって、そろそろかなと思っていると「どうや調子は」とおじさんがまたやってきた。でかいダンボールをどんとおいて「なんでも売らなあかん」という。なんでですかこれと聞くと「ゴミやな」と言い残して帰って

いった。箱の中には雑誌の付録がいっぱい詰まっている。店の前においておくところの小学生たちが覗き込んでいく。はじめのうちはダンボールに「自由はどうぞ」と書いていたのだが最近はそののをやめた。「これもらってもいいですか」と付録をいっぱい抱えていく子どもたち。自分が小学生やったらわざわざ声をかけるめんどうさの方が勝つてしまいうじうじと欲しいものも貰えないだろうなと思う。そういう子どももいるのだろうか。ここに座っていると勇気ある子どもたちの姿しか見えない。

十月と十一月は古本をかついで売り歩いてきた。今数えてみると出店したのは十三回。「毎週どっかに出店してますね」と、毎週言われていた。十月と十一月の週末を数えてみると九つしかない。「毎週どっか」以上のペー。誘われると断れないひと。誘われてなくても独りで出店している。なんだろう。すきなんだろうか。出かけるのが。出かけると売れるかというところなことではない。寒空の下で震えながら一日たちっぱなしで数千円。そこから出店料を引かれて何も残らない時だつてある。売れたときはビール飲んで寝るだけなのでよいのだけど、売れなかったときはなんでだろうと考える。考えてもわからないのでビールを飲んで寝る。冷えたビールがつかい季節になってきた。すぐお腹壊しちゃう。だからと言っ

てぬるいビールはあまり魅力的ではない。なんでだろう。何度出店していても出店の前日は準備が終わらない。毎回同じことをしているはずなのに毎回終わらない。いや毎回同じことをしているから終わらないのか。毎回とても眠い。きっと準備することに慣れてきて、早く寝れるようになったらおもしろくなくなるんだらうなと思う。

あまりにも出店で臨時休業が多すぎるので、たまに店番を頼むことにした。といっても開店の準備とかまでは頼む気はないので結局昼から保育園に行かなあかんとかそんな日だけ。白土さんは言っておいた時間の三十分くらい前にやってくる。でかいリュックには最近買った骨董なのかガラクタなのかギリギリのやつがいっぱい入っている。いっぱい持つてくるくせに、ここに並べますかとちよつと場所を開けるととてもうれしそうにする。戻ってからどうでしたかと聞くと「なんか謎の人が来ましたよ」という。頼んでおいた作業は大体三分の一くらい終わっている。やけに丁寧に並べられたガラクタのような骨董品は全然売れていない。

お年玉を握り締めたやけに丁寧な小学生が向こうからやってくる。この前きたときは「いつもありがとうございます」と言つて帰つていった。小学生つてそんなんやっ

たっけ。こちらこそお世話になっておりますと言おうとしてやめた。丁寧な大人にはなれない。まだ年越してないのにお年玉使つていいのと聞くと「お母さんにお正月本屋さん休みやねんつて言つたら先にお年玉使つていいことになりました」とうれしそうにいう。鬼滅の刃の十巻からあと全部。十三巻までは友達に借りたからいいんやつて。「五千円で足りませんか？」と落ち着きがない。小銭がいっぱい財布から出てきた。一円玉一個足らんけどまあいいか。底が破れたリュックにマンガがいっぱいにつまつて、女の子は「いつもありがとうございます」と言つて帰つていった。

八代日記 (十)

齊藤仁昭

(元長崎書店)

十二月某日

夜に風呂に入ろうと服を脱いだら左のわき腹に違和感あり。右手で触れるとブツブツしている。鏡に映したら結構な範囲に湿疹が出ている。臍の横にも出ている。こりややかした帯状疱疹だたぶん、困ったな治療とかどうするの?と妻に聞いたらあなたストレスと疲労ひどいのでは? 明日病院行け。とのことでその日はうろたえるのをあきらめて寝る。

翌朝病院へ。「あ、これは帯状疱疹ですね。」とのこと。薬を一週間飲み切ってくださいと言われおとなしく一週間飲んだが胃にだいたいダメージがあつて辛かった。酷くなる前に薬を飲み始めたからか、あまり疱疹は広がりずに済んだけれどわき腹から臍にかけての腹部がヒリヒリする症状はなかなか収まらない。

慣れない仕事と慣れない街で確かに疲れていたようだ。

年末の掻き入れ時は休めないだろうから、来月は少しゆっくりしよう。

十二月某日

クリスマスイブ。クリスマスケーキの出荷の段取りが悪く、午前2時出勤。焦りながら仕分け作業を行い、配達要員を順次送り出す。最後に自分が積み込んで出発。15時まで熊本市内をうろろると配達。八代への帰り道は眠くて仕方なかった。リポビタンDの350円くらいするのをコンビニで飲んで目を覚ます。コンビニではキキンを受け取る人が行列を作っていた。

十二月某日

日本語で書かれた書籍や新聞は縦組み右開きの割合が多いけれど、横組み左開きの方が読みやすい人も居るのじゃなからうかとふと思った。ウェブの記事は横組みが多いし、それに慣れている人で読書をあまりしない人には縦組みが読書のハードルになってはいないのだろうか。慣れや体感の問題だろうから縦組みじゃないと読みづらい人も多いだろうし、一概には言えないだろうけど、横組みの小説を読んでもいい。でも自分は右利きだから、右開きの方が読みやすいのかな…。印刷して試してみなければ。

書店や図書館では左から右に順に本を並べている（著者順、ジャンル順、分類順など）所が多いと思うが、背表紙は縦書きが多い。自分も左から右に並んでいる方が見やすいが、稀に文庫などを右から左へ並べていた書店があった記憶がある。見づらかったけれど、縦書きは右から左へ読んでいく、という点ではそれが見やすいという人もいるはずだ。電子書籍は横組みが合いそうだな。持っていないけど。

ああ街の酔いどれ灯りをたどる
乾いた靴の音落として走れ
見慣れた駅前黒服数え
軽やかな足で左へ右へ

薄い煙を真っ赤な目をして泳ぐ
浅い眠りがゆっくり途切れて消える

ああ街の酔いどれあたりを照らす
ドサイケなメドレー飛ばして走れ
賑やかな歌で昔のことを

羽根が生えるまで聞かせておくれ

薄い煙を真っ赤な目をして泳ぐ

浅い眠りがゆっくり途切れて消える

俺はキングオブドラック街は寝ゲロタウン
そこにいるのは SOUL BITCH

ああ街の酔いどれ扉を開きなさい

宇宙語で呪文を唱え

長い階段の四隅に潜り

五つ目の角を左に曲がり

薄い煙を真っ赤な目をして泳ぐ

浅い眠りがゆっくり途切れて消える

俺はキングオブドラック街は寝ゲロタウン

そこにいるのは SOUL BITCH

（ケバブジョンソン「キングオブドラック」作詞：杉浦真寛）

ユメユメワスルルナカレ

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマ

ン

正月に相応しく、夢の話で幕を開けよう。

木造の校舎。

階段を上がっていくと、踊り場で折り返しとなる。そこからは左右二股に分かれる。明治時代の洋風建築などに時折みられる様式だ。ただ、一方は二階へ通ずるが、なぜか、もう一方は三階にダイレクトに繋がっている。

二階の教室に行きたいのだが、どうしても三階への階段を上ってしまう。気付いて引き返そうとするが、階段の傾斜が急で、どうしても降りられない。一段が二メートルくらいになっているのだ。

止む無く三階に行き、隣の校舎に渡り、そこから一階に降りて、なぜか校長室の中を通り抜けて、玄関から前庭に出て、元の校舎に戻り、別の階段を上って今度は首尾よく二階にたどり着くが、教室には誰もいない。

この時間は教室移動だったことを思い出し、理科室へ行くと、生徒は音楽の授業を受けている。音楽の教科書を持ってこなかったもので、それを取りに…。

校内の光景の正体は分かっている。

小学校時代に、一年だけ通った、山間の小さな町の古い木造校舎だ。昭和初期頃の建築だったろう。階段は二股に分かれていたし、講堂の二階には畳敷きの巨大な、礼法室と称する部屋があった。

余談ながら、便所がまた凄いもので、水洗でないのは当然として、平屋の細長い建物が校舎と別棟で建っており、片側に小便器がズラリと並び、もう片側には個室が並んでいる。小便器も朝顔などというお上品なものではなく、コンクリートで溝が切ってあって、人ひとりの幅に背の低い側板で仕切ってあるだけのものだ。片山健が『美しい日々』で描いた世界である。蓋し、戦時中の兵舎の便所はかくの如きものだったのではなからうか。それ以前にも、以後にも、あんな便所には出会っていない。

迷宮温泉という、専ら古い温泉旅館に見られる、増築増築を繰り返している内に、廊下は曲がりくねり、段差だらけになったり、旧館と新館が同じ階同士で行き来できなかつたりと、火災でも起きた日には果たして何人が

無事避難できるだろう、と戦慄するような建物がある。

そんな木造旅館の夢もよく見る。階段を昇ったり降りたり、宿の主の居間を抜けたり、厨房やタコ部屋みたいな所を通ったり、温泉は脱衣所から、長い階段を降りて地下にあったり……。これらも、過去の旅行や忘年会の記憶から、切り貼りされたもののようなのだ。

赤瀬川原平のエッセイには、便所と風呂場が隣り合った温泉の話がある。いや、西洋式のバスルームや、ユニニツトバスの話ではないのだ。

大浴場の隅に便所があり、小便秘器から排水溝が湯船に通じているというものである。赤瀬川は、あんな所で用を足されたら、小便秘が湯に流れ込んでしまうではないか、と悩むのである。（「濡れた部屋」）

夢は、昔から判じ物の材料であって、古くは『周公解梦』やアルテミドロスの『夢判断の書』が知られている。

周公は、「高き楼閣に上りゐると夢見れば、萬事に徳を得てよし。」と言い、アルテミドロスも「はしごは出国と転居のしるし。はしごの段は前進を表す。」と語る。ヤコブの梯子（創世記二十八章十二節）は、彼と子孫への祝福を表し、明恵上人が、某年某月二十九日に記した、鐘楼（のようなもの）に上る夢も、悉知に近づいたこと

を示すとされる。（因みに、廁の夢解きもあるが、些か尾籠に下るので、年始には自粛するが吉であろう）

件の明恵は本邦初の夢日記の著者であるが、近代以降になると、島尾敏雄、正木ひろし、瀧口修造、横尾忠則、赤瀬川原平、吉武泰水などなど、枚挙に暇がない。文学者の日記は突飛ながらも物語性が感じられ、芸術家の日記は即物的でイメージが先行するのも面白い。

安部公房は、枕元にテープレコーダーを置いて、目覚めるや、枕から頭を起こす前に、吹き込んだそうだ。夢と言うのは、体を動かすと、記憶から消えてしまう、と南方熊楠も武田百合子も口を揃えている。

コクトー曰く

「睡眠の外へ出るやいなや、夢は萎れる。それは水の外に出ると死んでしまう海底植物なのだ。夢はわたしのシーツの上で息絶える。」

（朝吹三吉訳『存在困難』）

鳥取あれこれ

その五十三

内田 克彦 (地域研究家)

必要があつていろいろな書籍を読むと、鳥取出身の知らなかった人物が現れてくる。高橋政子は、看護史研究の一環で、高野京を一九六七(昭和四二)年に大阪豊中市で探し出した。高野は、東京帝国大学医科大学附属病院が一九九八(明治三十二)年、婦長養成コースとして開設した「高等看護法講習科」の卒業生で、当時唯一の現存者であつた。当該コースは一回きりで中止となつたため、なかなかその実情がつかめなかつたのである。その後、父の法事で、父が若い頃格別親しくしていた、山本五十六の姪でもあつた、お京さんという看護婦がいたことを知つた高橋は、高野を再訪する。高野にそのことを告げると、「絶句」した。高橋著『日本近代看護の歴史』の中に、次の記述がある。

どこでどう知り合つたのかとの問いに、彼女はボツンと、父がアメリカから帰国した当座しばらく、帝大高等看護法講習科出身の何人かに特別に英語を教へていたのだという。希望者のなかの1人に鳥取県出身の川崎という婦長がいたから、そうした人の仲介(なか

だち)でもあつたかと、昔を遠くしのんでいる。

因みに、高橋の父の前川義雄は、高橋著『いのちをみつめて』によると、一八八〇(明治一三)年、旧鳥取藩士の十代目に生まれ、東京専門学校で哲学を専攻し、その後、親の反対を押し切つて留学のために渡米中、ひどい脊椎カリエスにかかり、アメリカの慈善病院で死線をさまよつた末、熱心なクリスチャンになつて、日露戦争の頃帰国、一時東大病院に入院、小康を得て社会復帰、一九〇七年前後には岡山孤児院に就職、石井十次院長と対立、帰郷、創立間もない鳥取育児院に関係、その後自営業を経て一九三六年に亡くなつた、とあつた。

さて、東京大学医学部附属看護学校45周年記念誌出版委員会編『看護教育百年の歩み』(一九九五年五月発行)を見ると、「高等看護法講習生卒業名簿 明治三十一年十一月七日入学 同三十三年十二月十四日卒業」の表題のもとに、一七名の「番号」「族籍」「氏名」「生年月日」が載つており、「七 新潟 高野京 明治九、一、一」の隣に、「八 鳥取 河崎志津 明治九、八、五」とあつた。

さらに、東京大学医学部附属病院看護部看護史委員会

編『看護の歩み―明治・大正・昭和を通して―』（一九九一年三月発行）を見ると、次の記述がある。

明治三十三年（一九〇〇）年、高等看護法講習科の卒業の年、すでに五名の婦長が誕生した。佐々木キクノ、藤井静、河崎シズ、高野京、安達タカであり、判任官で任命された。

さらに、「明治時代の看護婦長名」の中の、一九〇〇年及び一九〇三年の項には「河崎シズ」の名があるが、一九〇七年では消えている。その間に何かあったのだろうか。

帝大附属病院と言えば、碧川（当時は、堀）かたが一八九五（明治二八）年一月に第六期生（「看護法講習科」としては第五回生）として入学し、翌年一月二十七日に卒業した後、看護婦としてしばらく勤めていた場所である。同じ職場の鳥取県出身同士、交流があったのだろう。

『弓町本郷教会百年史』（一九八六年一〇月発行）によると、次の記述がある。

看病婦の河崎しづは同じ看病婦の堀かたの紹介によつて本郷教会に来たり、洗礼をうける

同志社大学人文科学研究所編『「新人」「新女界」の研究』（一九九九年三月発行）によると、さらに詳しい。

かたは（略）本郷教会で海老名から洗礼を受けた。受洗の日は確定できないが、同じ看護婦・マッサージの河崎しづが、かたの紹介で一八九九年五月七日に受洗しているからそれ以前となる。

『看護教育百八年の歩み』によると、高等看護法講習科の合格者は「教員経験を有する者もしくは教員免許を有する者」「女学校卒業者」など「当時としては高学歴の女子が入学」とあるので、どこかで名前が出てこないかと思っていれば、『久松小学校創立百周年記念誌』（一九八五年一月発行）の中の、「因幡高等小学校」時代の「明治二五年三月卒業」の項に「河崎シズ」の名を見出すことができた。

今のところこれ以上はわからないが、明治時代に、鳥取出身で東京帝大附属病院の看護婦長となった「河越しづ」について、今後ともチェックしていきたい。

戦禍の楽人

Ⅱ 修士Hの場合 下

武中淳彦(秦阜梅林 本名)

(楽人)

Ⅳ 灰色の戦争が：

…とは言え其れ以外、軍隊生活で「良かった事」なんて他には何一つありやしない。自信を持って云うが、戦争は勝敗以前、人間から何もかも葬り去つて了う。平和、幸福、自然、文化、芸術も。(顔を顰め) 私は「接近戦での殺し合い」こそ経験せずに済んだとは云え、近しい人の命や友情、信じる心や誠意、そう言った尊いものを何もかも喪ひ：灰色の戦争が終わって未だ自分が神に生かされて在る事、そして神の臨在と全てが唯創造主の御手の中に在る事を始めて知った。其れ迄、経験的に漠然と神を身近に感じて居ただけけれども、戦争を通じてあすこに神の意思をしっかりと感じ(そこから後年拙作オラトリーオ「バベルの塔」を書いたんだ)美しかったドレーズデンの街を灰塵に帰し、広島長崎(「殊に長崎は、美しい港町だったと聞いているよ、プッチーニを魅了※①した」)に原子爆弾を落とす「怒りの神」、恐れのある事である事を改めて知ったのだよ。実感を伴って…。」

V 決意、そして：

「私が、本当の意味で信仰を持ち、唯神を賛美する為だけに作曲し、絵筆を執ろうと※②思ったのは、軍隊で此の世の不幸を舐め、失望し理不尽を味わい尽くしたから。」「此の世に生かされて在る内は常に神に感謝を忘れず」(空かさず僕)「酒も?! でしょう」「ハハハ、良いこと云うな、程々の酒も嗜み乍ら」(声を揃え)「唯、神の栄光を誉め讃えよう!」「しかし、武中、若い君には今是非言っておきたい、戦争は「悪事」だ。勝ち負けは関係無く、どの方面、誰にとっても、何一つ好い事は齎せない。此の世の中で、絶対的な善悪なんて、さらには無いのだけだ。」

戦争では唯々、徹底的な破壊と殺戮がサタンの哄笑を誘うのみ。其処には神の失望と落胆こそが伏してゐるのだ：我々人間への、深い…天を仰ぎ伏し目がちに、低く通るバリトンで師は呟いた、悲しく…。

2020. 09. 10

※①「プッチーニを魅了：」↓プッチーニは往時長崎を舞台上に「蝶々夫人」を創作した。

※②師は、国立ヴィーン美術アカデミーに学んだ表現主義の画家でもあって、ヴィーンの森麗の山荘では晴雨画架とスコア両方の創作に同じように情熱を傾けてゐた。

【今回の一枚】

Mgハイリツヒ・ガッターマイヤー・アルバム

①「キルビッシュ組曲」(A. ヴィルトガンス原作、作曲家オリジナルテキストの歌劇に拠る) ②G. トラークル「黙示録と滅亡：」 ③交響詩「夢と死」(S. ゲオルゲの詩に寄せて) ORF 奥国管放送合唱団、NOE 交響楽団他 指揮 M. トウルノフスキー, K. エステルライヒャー他 rec. 1977 ~92. ORF スタジオ NOE ヴィーン、放送録音 アマデオ 1993 (装画 Mg ガッターマイヤー「混沌」(天地創造より))

年賀状

あきの素生

(くうねるめがね)



この冬は雪が多くなる、という予想のとおり、よく降った。最初に積もったのが水つばい雪だったので、朝早くに猫が付けたちんまりとした足跡を見ながら、真っ白い新雪をぎゅつぎゅと踏んで歩く楽しみはお預けとなっている。ずっとお預けにしたままでもよいが、わりかしすぐに叶いそうな気がする。

気付けば十二月が終わりかけていて、心底驚いている。師走とはそういうものなのかもしれないし、コロナに気を取られていた、というのものもあるかもしれない。日付が記号ほどの意味しか持っていなかったという感じ。なんて言っている、何も解決しない。手つかずの年賀状を眺めて、さて今年はどうしたものかと思案している。

元々、年賀状を書くのが、というか、どんな絵柄にするか考えるのが好きだった。中学から高校にかけては、「プリントゴッコ」を愛用した。「日本の国民行事」なんてキャッチコピーがあったような。原稿を専用のシー

トに挟んで本体にセットし、ふた(?)をえいやと押して、ガツチャン、ビカツと製版をする。ふたには大きい豆電球のようなランプを二つ取り付ける。これがビカツと光って、シートに原稿のデザインを焼き付けるのだ。ランプは一度でひび割れて、使えなくなる。これほどはかないランプがあるうか。多色刷りなどで原稿が二枚以上になるときは、特に惜しいと感じたが、だからといって、工夫のしようもなかった。原稿を少なくなるよう仕上げることにくらいか。ひび割れたランプの焦げたようなにおいが懐かしい。

最初は「プリントゴッコ」を買ったときに付いてきたのだろうデザイン集から好きな絵柄を選んで、それがうまく印刷できるとうれしかったが、そのうち自分で絵や字を書いて、それを「プリントゴッコ」で印刷することにはまった。一番凝っていた時期には、印刷したインクが乾かないうちに振りかけ、裏からアイロンを当てて溶かすパウダーを取り入れた。これを使うと線が少し盛り上がり、エナメルのようなつやが出て、素人っぽさが減じる(ように感じた)ので、手間がかかってもせつせと粉をふりかけアイロンを当てた。そのほか、同じようにアイロンを裏から当てると、線がもこもこふくらむペンなんかも使っていた記憶がある。なんだか、年賀状づくりに心血を注いでいたって感じた。

消しゴムはんに力を入れた年もあった。松竹梅、毬小づち、干支などの小さいはんに。毬の模様や小づちの細部などは、さらに小さいパーツを作り、根気よく押した。干支以外は毎年だつて使えるものだから、と作ったときは思ったが、年賀状を出す顔ぶれはほぼ同じ、少し寝かせてからの方が、と考えてしまいこんでいる。干支が一回り以上したので、今年あたりひっぱり出してみてもいいかもしれない。

似たようなところで芋版に挑戦したときは、彫つてから押すまで目を開けてしまつて失敗した。表面の水分がなくなつて凸凹になり、何の絵やらわからなくなつてしまったのだ。かまぼこ板にしておけばよかった、と後悔した（かまぼこ板を彫つた年もあった）。結局彫つた絵柄をパソコンに取り込んで印刷した。

やはり今はパソコンが主流だ。絵を自分で描くこともなくなつた。年若いひとたちに教えてもらい、無料でもいろんなデザインを選んで年賀状を作れると知つた。このところ、プリンタの調子が悪く、数枚印刷すると、インクが漏れたようになってハガキを汚すので、印刷すら発注するようになった。プリンタはもつぱらスキヤナとして使用している。

でもなあ、とおこもりがちの日々の中で考えた。そうたくさん出すわけでなし、下手でも何でも、手書きでもはんにでも版画でも、また自分で一から作つてみてもいいんじゃないか。たぶん、今でも年賀状を作るのが好きだ。今年は、お出かけも帰省も無しの年末、時間はいつもよりありそうだし、なんて考えてしまったために、今、手つかずの年賀状と迫りくる正月の前に、さてどうしたものかと思案している次第だ。コロナがあぶり出す自分の好きなもの、本当にしたいこと。コロナに感謝なぞする気はないが、覚えておこう。あ、「あぶり出し」という手法もありますね。きつと使わないけれど。



イラスト

あきの素生

あいきし



ドラマメリア (座敷わらし)

年末が近づくと「よいお年を」という挨拶があちらこちらで飛び交う。ひと足早くお正月休みに入る同僚と、習い事の仲間と、馴染みのお店のご店主と。交わし合ういつもの挨拶。

ずっと以前は日常にあふれるそんな決まり文句が苦手だった。量産型の言葉には気持ちが悪くもつていないような気がして、口に乗せることをためらっていた。まだ鳥取に来る前、大学を卒業してすぐの頃だ。未熟で愛想のない若者だったと思う。

あれから十数年経ち社会人生活も長くなると、さすがにそんな青いことは考えなくなる。電話口では何はともかく「いつもお世話になっております」、飲み会の翌日には「昨日はお疲れ様でした」、と上手ではないもののそれなりにつるつると決まり文句が口をついて出る。

そして自分が使う側になると思う。気持ちが悪くもつていないということがあるだろうか。「おはようございます」「もお疲れ様です」も、職場で利用者の方に対して、もつともよく使った「ありがとう(ござ)います」にだって、

その決まった数の音に自分の心がきちんと乗ればいいと思いつながら発していた。親密な相手への強い愛情でなくとも、今この場だけの関係であつたとしても、わたし達は言葉を贈った相手が心穏やかにこれからの時間を過ごしてほしいと思っている。そのささやかな願いにも似た思いを決まり文句に託すのだ。

今年は帰省しないので、毎年あわただしく投函する年賀状をいつもより丁寧に書いた。コロナ禍の中、多くは都市圏に住む友人達とはたしていつ安心して会うことができるのか、今は見当もつかない。それでも「また会おうね」「元気で」と祈りながら。

これを読む皆さんも、どうぞよいお年を。そしてまた次号。

・編集後記:

新年の区切りにノートPCを買いました。なまけの虫に負けないようあえてデスクトップ派だったので、便利さに負けた。いいえ、なまけにマケタ。

ドラマメリア (編集長)

年末年始は小川寛大『南北戦争』中央公論新社を読んできました。北部が共和党、南部が民主党。南部の立場は第二の独立戦争。北部は統一。知らない知見が多く驚きました。国民国家がゆらいでいますね。

奈良敏行 (発行人)